バリ島におけるリゾートホテルと地域文化

桑　原　季　雄

はじめに

山下によれば，今日の日本の観光パンフレットの大きな特徴の一つはホテル・ツーリズムと呼びたくなるような情報の満載であるという。「ホテルはグレードづけられ，バリに行ったかどうかではなく，どのホテルに泊まったかが問題となる。その意味では選ばれるホテルはブルデューのいう「ディスタンクシオン」，つまり差異化を表明する基本的な媒体になるのだ」（山下 1996:39）。このように，バリの観光は一面でホテル観光の様相を持ち，どこのホテルに宿泊するかによって「差異」が生じ，それが観光経験の多くを決定する。これまで人類学的調査においてばかりでなく最近の観光人類学的研究においてもリゾートホテルそのものがその人類学的の研究対象になることはほとんどなかった。それは一つには，リゾートホテルが地域社会から孤立して世界の資本主義的市場経済と直結し，人類学が求めてきた「真正の文化」が発現する場から最も遠い所にあり，地域文化との関わりが薄いと見られていたからであろう。しかし，最近の新しい傾向として，一部のリゾート系ホテルグループは，バリの文化をよく理解し，またホテルグループのオーナー自身がバリ人であったりして，従来の外資系のリゾートホテルとは違った趣向でホテルへのバリ文化の巧みな取り込みを行っている。さらにリゾートホテル自体がバリの地域社会と連携しながら特にバリの精神文化を体験できる場を志向している。今日のバリの観光のもう一つの型はホストにとってもゲストにとってもまさにホテル観光の周辺に展開しているように思われる。

本稿では，こうしたバリのリゾート観光の現状を踏まえて，リゾートホテルの発展という視点からバリ島の文化観光の歴史の簡単なスケッチを試み，特に

戦後のインドネシア政府の観光政策の目玉であったバリ島南部のヌサドゥアの巨大リゾートホテル群の開発の経緯やその後の展開について述べる。さらに，南部ジンバラン地区や中部のウブドを例にリゾートホテルと地域社会，地域文化との緊密な関係についてふれ，バリの文化に忠実であろうと試みるいくつかの新しいタイプのリゾートホテルによるバリの文化様式の巧みな商品化について考察する[1]。

1．バリの文化観光とリゾートホテル

バリの文化と観光や「文化観光」についてはすでに多くの研究があり（山下 1992, 1993, 1996; 吉田（竹）1997, Picard 1993,1996），ここであらためて繰り返すことは避けるが，リゾートホテルの誕生と発展という観点から簡単にその歴史を眺めてみたい。

バリの観光化とオランダ植民地支配との深い関わりについては永渕（永渕 1998）によってすでに詳しく指摘されている。それによると，バリの観光化の幕開けはオランダ植民地時代の開始とともに始まったのだ。オランダはバリを軍事制圧した1908年に，蘭領東インドを観光目的地として売り込むためにバタビアに政府観光局を開設したが，当時のバリ島はまだヒンドゥ・ジャワ文明の「生きた博物館」と見られていたにすぎなかった。観光客にバリの門戸が開かれたのは1914年である。この年，バリではオランダ植民地政府によるバリの軍事平定が終了し，文民政府が占領軍に取って代わり，これによって，スラバヤからの船の寄港が可能になった。バリに上陸した観光客は馬か車で島内を周遊し，植民地行政官の現地視察の際の宿泊施設となっていた政府のレストハウスに滞在した。しかし本格的なバリの観光化は，1924年に王立定期航路会社（ＫＰＭ）がバタビア，スラバヤ，マカッサルとバリ北岸のブレレン（シンガラジャ）港を一週間で結ぶ定期船の就航によって具体化された。ブレレンには観光局代理店が置かれ観光客のために英語を話せるガイド付きのタクシーの手配やレストハウスの宿の手配を代行した。金曜日の朝到着した観光客は，日曜の夕方マカッサルからの同じ船に乗って戻るまでの２泊３日間，自動車でバリ島を足早

に周遊したのであった（Picard 1996:24-25）。

しかし，当時，観光客が宿泊できるホテルはほとんどなく，オランダ植民地政府は当初は植民地行政官用のレストハウスの使用を観光客に許可することで対応していた。1928年になってようやくデンパサールに，それまでのレストハウスに代わってバリホテルがオープンした。バリホテルは王立定期航路会社によって建てられたのだった。続いてキンタマーニのレストハウスがバトゥール湖観光の観光客専用のバンガローホテルに改修された。

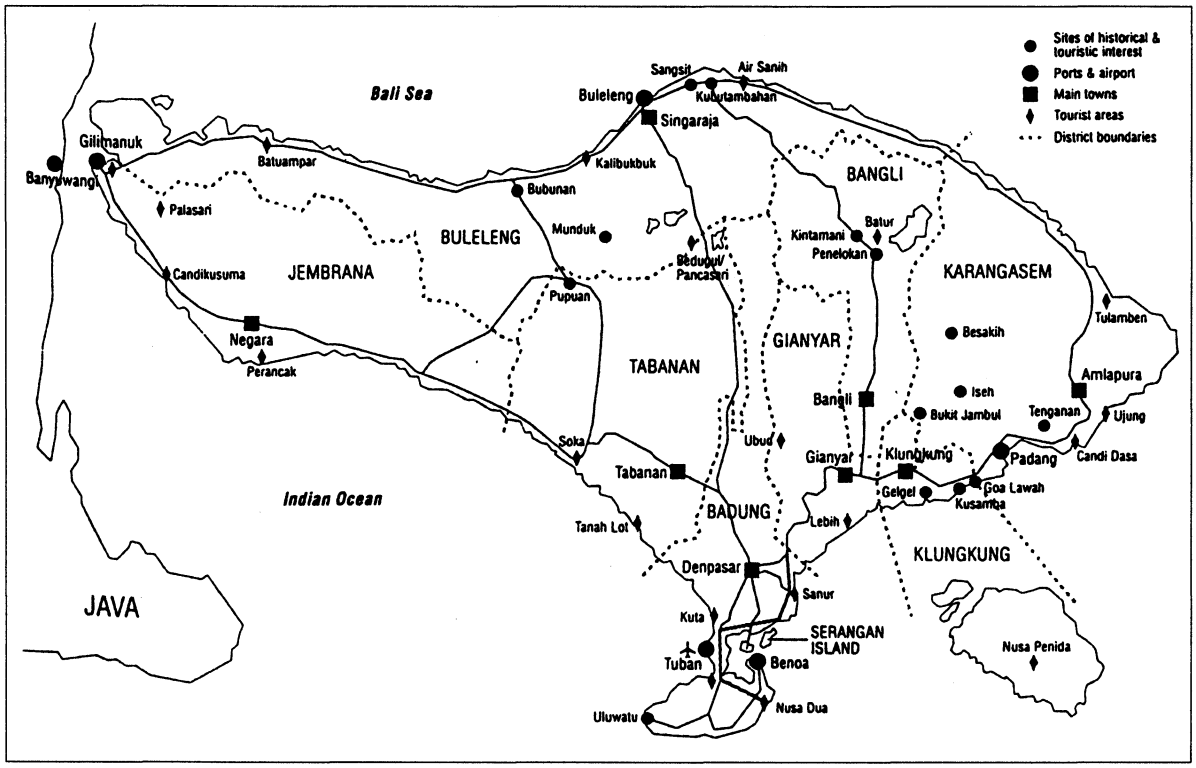
1920年代末までに，週平均４便の船が入港するようになった。1934年には，バリ島西端のギリマヌクとジャワ島東端のバニュワンギを結ぶ定期フェリーが毎日運行するようになった。また1933年以降，スラバヤとバリの間に航空路線も開設され，デンパサールの近くにトゥバン空港が開港し，週３便運航された。

観光局による最初の統計によれば，1924年の観光客数は213人であったが，1929年には1,428人と，その数は着実に増えた。その後，経済不況の影響で来島者は何年間か低迷したが，1934年になると，観光客数は再び増加に転じ，1930年代末にかけて平均約3,000人の来訪者があった（ibid. 1996:25）。

戦前のバリのホテルの収容能力はダブルの部屋で70室であった。その内訳は，バリホテルが48室，サトリヤホテル（1930年代初めにデンパサールに建てられた中国人のホテル）が16室，そしてキンタマーニのＫＰＭのバンガローホテルが６室であった。その他，島内８つのレストハウスでダブルの部屋がさらに32室利用可能であった。アメリカ人経営のクタのいくつかのバンガローも利用できた（ibid. 1996:25）。

稲垣は，観光学という立場からバリのリゾートホテルの観光表象の変遷を分析し，バリのホテルの建築様式において，コロニアル，インターナショナル対バリの伝統的建築様式，場所性の重視といった二項対立的構造が，３度繰り返されてきたことを指摘する。それによると，その最初は30年代であり，白壁にコロニアルスタイルの瓦をのせたバリホテルに対して，アメリカ人のコーク（Koke）夫妻は地元のコテージタイプの建築様式を取り入れて茅葺きのクタビーチホテルを建てた。その建築方法は，レンガでコテージの土台を造り，木で骨

地図1　バリ島全図



(Picard 1996:39)

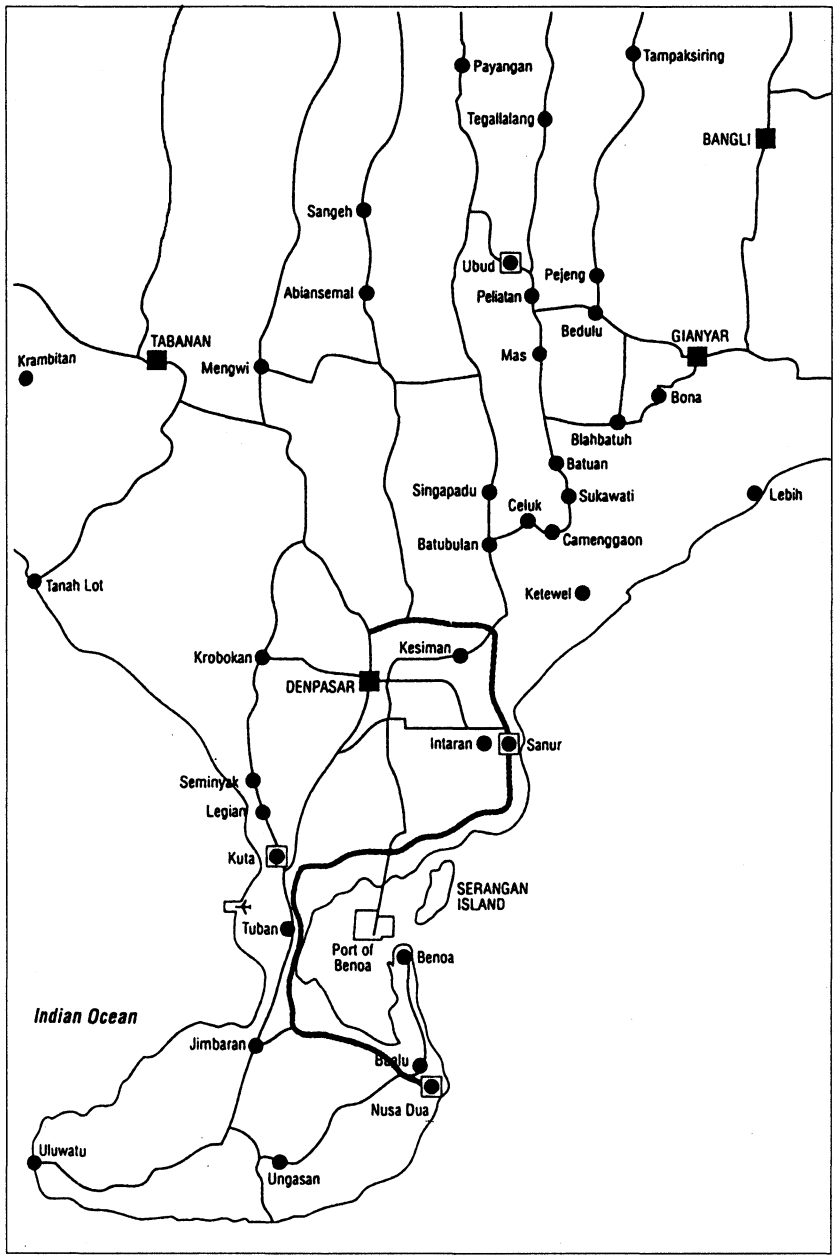
組みをくみ，アランアランという草で屋根をふき，竹を編んだパネルで壁を造り，出来上がった各パーツを竹製の細い紐でつなぎ合わせるものだった。この建築様式は，現在のバリのリゾートホテルの原型となっている。バリのホテルの歴史的特徴はこのときから始まったとされる（稲垣 1998）。

2．バリ観光開発のマスタープラン

バリの観光化の歴史はリゾートホテルの発展の歴史と重なる。特に戦後のバリのリゾート開発の歴史は伝統文化の保護か，それとも観光化による経済発展かで大きく揺れた歴史でもあった。このインドネシア独立後のバリのリゾート開発の歴史をみてみよう。

外国人観光客を惹きつけるため，バリ島の名声を利用しようとして，ジェット機が離発着が可能なトゥバン国際空港の建設に着手し，サヌール海岸に日本の戦争賠償金によって豪華なバリビーチホテルを建設したのはスカルノ大統領であった。バリビーチホテルは，奇しくもスカルノ大統領が政変で失脚しイン

地図2　バリ南部拡大図



(Picard 1996:67)

ドネシアが世界に門戸を閉ざした1966年に完成した（Picard 1996:42-43）。母親がバリの出身であったスカルノ大統領は，バリをお気に入りの静養先にし，賓客には必ずバリに立ち寄ってもらうようにした。しかし，1960年代末までバリの国際観光は，インフラの未整備や荒廃した経済状態，政治不安，政府の外国人に対する警戒心などから，それほど観光客を惹きつけるには至らないまま

推移した。

インドネシアがスハルト大統領による「新秩序」政策のもとで再び国際社会に開かれたのは1967年であった。そしてングラライ国際空港の開港日の1969年8月1日はバリの国際観光が再開された日であり，まさにバリのマスツーリズム元年であった（ibid.:43）。

1969年，国家開発計画委員会は25年以内にインドネシアの経済的離陸を意図して「開発5カ年計画」を開始した。第1次5カ年計画（1969-1974）では，インドネシアの経済発展の要因としての国際観光の重要性が強調され，観光政策の土台が敷かれた。第1次5カ年計画はインドネシアの最良の財産が植民地時代から受け継いだ「楽園」としてのバリのイメージにあることを認め，バリ島をインドネシアのショーウインドウにし，バリ島の国際観光開発を最優先することを提案した。バリはインドネシア群島の将来の観光開発のモデルとしての役割を与えられたのである。

観光は環境をそれほど破壊することなく外貨を稼ぎ，開発やインフラ整備を促進し，毎年労働市場に参入してくる約200万の若者に雇用を与えることによってインドネシア国民に利益をもたらす産業とみなされた。さらに，世界におけるインドネシアの肯定的な認識の促進に寄与するものとしても考えられた。

1969年3月，インドネシア政府の要請によってインドネシアを訪れた世界銀行の代表団は，バリの観光開発のためのマスタープランを作成するよう提案した。それを受けてインドネシア政府は早速バリのマスツーリズムの成長を促進するプランの国際的入札を行った。その結果，多くの様々な国際グループの中からフランスのコンサルタント会社「フランス海外領土観光施設中央協会」（SCETO）が落札し，インドネシア政府はSECTOにバリ国際観光開発プログラムの考案を委託した。SCETOは1970年4月に，国連開発プログラムの資金提供を受け，世界銀行の援助の下，マスタープランの作成に着手し，ちょうど1年後の1971年4月に「バリ観光開発のマスタープラン」として6巻からなる計画書を刊行した。これは1974年に世界銀行によって改訂された後，その監督下に施行された。

マスタープランの目玉は自足的な国際級のメガリゾートコンプレックスの建設にあった。マスタープランが選択した場所はバリ島南端半島部東側のヌサドゥアの海岸線に沿った425ha の土地であった。SCETO はそこをリゾート開発し，豪華なビーチ・エンクレーブ（飛び地）をつくって観光客をそこに収容することを提案した。マスタープランは，富裕な西欧人観光客が2，3日ビーチで休日を過ごすためにバリにツアーでやってくるということを想定していたのだった。

フランスのコンサルト会社が直面した最大の問題は，バリの豊かな文化と自然環境を損なうことなく観光開発するにはどうしたらいいかということであった。結果として，コンサルト会社は観光リゾートをバリ人居住地から遠く離れた所に隔離することによって観光の前線のインパクトからできる限りバリの文化を守ろうとした。しかし，バリ観光の最大の呼び物は生きた伝統文化との接触の可能性にあったので，コンサルト会社はバリ的な生活様式の最も典型的なものを見せてくれる地域を通過する観光周遊ルートを作る必要があると判断した。マスタープランを規定した原則はその伝統文化を保護することによって，バリの観光の持続的発展を保証することであった。かくして，バリの観光は滞在的，収容的な「シーサイド観光」と巡回的，拡散的な「文化観光」に2分された。伝統的な型にとらわれない観光客向けのダンス公演も奨励された（ibid.:46）。

マスタープランの作成は市場調査に基づいてなされた。それによると1985年までには734,000人の観光客がバリにやってくることが予測された。観光客は豪華なホテルに平均4日間滞在し，一日あたり約＄35出費するとみられた。SCETO は，この潜在的需要に対応するために，バリ全体で9,500室を用意する必要があると提案した。その内訳は，バリ島南部の半島東岸部ヌサドゥアに6,950室，残り2,550室をサヌール，クタ，デンパサールにつくるということであった（ibid.:45-46）。

マスタープランは1971年4月の刊行の翌年，大統領令によって採択され，1973年12月にバリ州議会によって批准された。世界銀行は，外国人コンサルタ

ントで人類学者のレイモンド・ノロンハに，バリ社会への観光のインパクトを調査するよう依頼した。しかし彼の評価はかなり批判的なものだった。ノロンハの報告を受けて，世界銀行の調査団がバリに赴き，1974年5月にその査定の結果を刊行した。それによると，世界銀行はバリの観光開発の展望に関してSCETOよりもかなり控えめに評価していた。世界銀行の報告は，1973年の95,000人の外国人観光客の予測で始まって，1978年には290,000人，1983年には540,000人の来訪者があることを想定した。また，観光客の平均的出費は＄46で，滞在日数は3.5日と推定された。ヌサドゥア・プロジェクトの大筋は維持されたが，1985年までに建設される国際級の部屋数は2,500室に制限された。サヌール，クタ，デンパサールに建設されるホテルの部屋数も1,600室に下方修正され，合計4,100室の国際級の部屋が1985年までに準備されることになった（ibid.:48-49)。

3．ヌサドゥア

マスタープランによってリゾートコンプレックスに提案された場所ヌサドゥアは，バリ島最南端東側ののまっすぐにのびた海岸部分で，その地名は地元でヌサ・ドゥア（「二つの島」）と呼ばれてきた海岸に接合する2つの小島に由来する。

この場所はバリの中心部から隔離されかつ空港からも遠くないのでマスタープランの立案者にとってはまさにうってつけの場所であった。半島部の晴れわたった気候やココナッツしか繁茂しない砂地の土壌もビーチリゾートには有利であった。隣接する村ベノアの天然の港はマリンスポーツと娯楽的なクルーズだけでなく国際船が入港する重要な港にもなった。ヌサドゥアの北およそ20キロメートルの所にある州都デンパサールはサービス・タウンとして発展した。ヌサドゥアは高速道路によって国際空港やデンパサール，バリ周辺の主要な地域と結ばれた。

マスタープランは巨大プロジェクトであった。425ヘクタールの敷地は12の区画に整地されホテル開発業者にリースされることになった。計画にはホテル

予定地ばかりでなくホテル専門学校，リゾート・コミュニティセンター，そして，水道，電力，汚水・廃棄物処理施設，洪水排水システムや灌漑システム，通信システム，道路などの生活基盤設備も含まれた。

ホテル専門学校とブアルとベノアという，ヌサドゥア開発プロジェクト予定地に隣接する2つの村の改善プログラムに対しても開発資金が投入された。

ヌサドゥアの中心部に最も近い村ブアルは，1973年当時，ココナッツの木と海以外には道路も市場も何もない孤立した貧しい農漁村であった。村人は米を買うために，ボートに乗ってわざわざベノアの港まで行き，そからさらに歩いてサヌールまで行かなければならなかったという。そのブアル村の人々にとって，1976年は新しい時代の始まりだった。というのは，リゾート開発プロジェクトの恩恵にあずかって電気と水道が村にもたらされ，以前は貧しくて孤立したこの村を，バリで電気がきた最初の村にしたからだ。

ところで，ヌサドゥア観光開発計画の当初から，そこには，地域住民に対する観光の破壊的で潜在的に否定的な影響は出来る限り最小限にすべきだという配慮があった。そのためにいくつかのガイドラインが設けられた。即ち，(1) 地域の村々は観光開発地域に建設予定のインフラ施設の恩恵にあずかる。(2) 寺院や地域共同体にとって重要な他の宗教的場所は保護されなければならず，それらの場所への出入りはいかなる場合にも妨げられない。(3) ビーチは公共の場所であり，地域住民がビーチで楽しんだり，儀礼的供え物をしたり，その他の非営利的活動のための自由な出入りが保証される。(4) 周辺地域住民には職業訓練，雇用，商業活動の機会において特別の優先権が与えられる。(5) バリの文化的，審美的価値はホテルの建築や装飾，文化的活動に組み入れ保持する，という内容でのものあった（Bhanu 1995)。

4．ヌサドゥア・コンセプト

インドネシア政府はヌサドゥア・プロジェクトの実現という複雑なプロセスを執行するため，1973年，ヌサドゥア・マスタープランが出てまもなく，バリ観光開発会社（ＢＴＤＣ）を設立した。ＢＴＤＣの責任はマスタープランのガ

イドラインに沿ってヌサドゥアの観光開発を執行することであった。即ち，インフラの計画，開発，建設，管理，ホテルの土地のリース，プロジェクトの全体的品質の監視などである。

リゾートコンプレックス全体のデザインを統一的なものにするために建築デザインのガイドラインが設けられた。伝統的バリの建物の原理を反映する開放的な組立ユニットによる建築や地元の建築資材の使用が奨励された。建物は低層で，ココナッツの木の高さ（15メートル）以下であること，建物の屋根は赤褐色の屋根で，建物の建坪率は30％と規定された。これらの建築ガイドラインの監視，吟味，統制のため，専門家によるデザイン委員会が設置された。

ＢＴＤＣはホテルとホテル専門学校（ＢＰＬＰ）に建物と施設を提供した。インドネシアで２つ目となるホテル専門学校はヌサドゥアのブアル村に建設され，1978年にオープンした[(2)]。施設には語学ラボと，設備が完備した50室の実習用のホテルが含まれた。最初の学生募集では，ヌサドゥア地域出身者に優先権が与えられ，バリの他の地域出身の学生は10％に抑えられた。以来，プログラムは拡大し改版され，現在では学士と修士の学位が授与され，国中どこからでも学生を受け入れている。ＢＰＬＰキャンパスは現在の場所からヌサドゥアの反対側の半島西岸部に移設され，その資格もカレッジからインスティチュートへと格上げされた。

バリのすべての重要なプロジェクトは儀礼的供え物で始まる。ヌサドゥアで最初で最大のリゾートホテル建築プロジェクトは1974年に土地の浄化儀礼で始まった。ガルーダ航空をオーナーとして着工された450室のこのヌサドゥア・ビーチホテルは1983年，スハルト大統領の臨席の下，厳粛な雰囲気の中で盛大にオープンした。

1990年までに５つのホテルがオープンし，合計で2,200室が確保された。翌年，さらに３つのホテルが完成し，「インドネシア観光年」の1991年４月にヌサドゥア・リゾート全体のキャパシティは3,800室になった。1996年現在，ヌサドゥアの12の土地区画のうちの10区画に10軒の高級ホテルがたち，部屋数の合計は4,585室（バリ全体のホテル・キャパシティの約15％）となり，10,000

人の雇用が生まれた。

また，18ホールの国際級のゴルフコースと最新設備のコンベンションセンター，そしてセントラル・アメニティ・コーアとよばれるブティックやレストラン，伝統舞踊やダンスが上演される円形劇場のあるヴィレッジ・コンプレックスも完成した。

ＢＴＤＣの効果はインドネシアのヌサドゥア・プロジェクトの成功によって証明された。現在，80％の着実な稼働率で稼働し，世界国際観光コミュニティにおいてますます高い評価を受けている。

ヌサドゥアは現在，インドネシアの観光リゾートコンプレックスのモデルとなっており，ＢＴＤＣの経験やノウハウとヌサドゥア・コンセプトとして知られる次のような原則によって注目を集めている。(1) 1つの監督体によって開発され管理される自足的リゾートコンプレックスであること。この利点は，(a) インフラの開発，(b) 地域社会に対する観光の潜在的に有害な影響の最小限化と開発の恩恵の最大化，(c) デザインの統一性や品質管理，管理維持体制と安全性の保証という点において有効であること。(2) 地域の自然，社会環境への配慮。(3) 地域文化の反映（Bhanu 1995:28-31)。

このヌサドゥア・コンセプトは発展途上国の観光開発の根本的ジレンマ，即ち，一国のその特徴ある文化を破壊することなくどうやって観光客に提供できるかという問題の解決に有効であるとされた。

地域の価値や技工をリゾートのデザインや活性化に組み入れることによって，地域文化は肯定され，住民は仕事を供給される。企画された観光地へのガイド付きの周遊旅行を提案することによって，住民は少なくとも大量の訪問者の侵入から守られる。また，リゾート内でテーマ志向の地元料理や伝統的舞踊芸術プログラムの上演によって，少なくとも観光客とホスト国の住民との間のささやかなレベルの遭遇がある。ヌサドゥアのこうした取り組みは一つのユニークな試みであり，観光開発のモデルとなっている。

5．マスタープランの波紋

マスタープランは，高所得者層の観光客を対象に立案され，彼らは高価な高級ホテルに滞在することが期待された。ところが実際には，観光客の大部分は若者，安旅行者，豪華なホテルよりもバリをもっとよく見たいと思っている熱心な人たちだった。現在この全く異なる観光客グループ（パックツアーグループで，多額のお金を使う観光客と，個人で旅行し，少額しか使わない観光客）に対して2種類の設備とサービスで対応している。

豪華なホテルは，ヌサドゥアとサヌールビーチに集中し，そのホテルの大半は内外の大企業体により所有，運営されている。ヌサドゥアの観光開発は，特に国際開発協会や政府その他からかなりの融資を必要とした。またこれらのリゾートでは，地元民を従業員として採用したが，その大半は未熟練労働者としてであり，地元バリ経済との結びつきは限られたものでしかなかった。

格安の観光客の増加はマスタープランの立案者たちにも予想外のことであった。このような事態に急いで対応するため，新しいリゾートが開発された。クタやウブド，バトゥール，ロビナあるいはチャンディダサといった地域である。これらの地域では観光宿泊施設のオーナーや従業員の多くはバリ人で，地元の経済との結びつきもより密接なものとなった。

フランスのコンサルタントによって立案され，世界銀行の専門家によって修正され，ジャカルタの専門技術者によって施行されたマスタープランであったが，バリではその後あからさまな批判がわき起こった。マスタープランはインドネシア国家政府による観光開発プランではあるかもしれないが，それはあきらかにバリの発展のためのプランではないという。バリ政府当局は，3つの明確な点でそのマスタープランに反対した。(1) そのプランは観光がバリの社会や文化に及ぼす影響に対して十分な注意を払っていない。(2) バリ島南部，特にヌサドゥア・エンクレーブの計画における観光リゾートの地理的な集中化は，全体的な地域開発を提供しない。(3) 上からの押しつけられたプランであるため，地元政府にはバリにおける独自の観光政策を実施することが許されていない（Picard 1993:83)。

マスタープランに呼応して，バリ政府当局は彼らがバリ島に最も適していると思った観光，即ち，「文化観光」（パリウィサタ・ブダヤ）という概念を1971年10月のマスタープランの公表の数カ月後にはすでにまとめていたのだった。さらに同時期，州知事は「バリにおける文化観光に関するセミナー」も開催した（ibid.:84-85）。

バリ政府当局は「観光客はバリのために存在しなければならないのであって，バリが観光客のためにあってはならない」というスローガンをかかげ，以下のような点に従って自分たちの立場を明確にした。(1) バリの観光は「文化的」であるべきだ。それがバリの文化を育てていくものでなければならない。(2) 観光リゾートは島内に平等に隈無く行き渡るべきだ。そうすれば経済的利益の公平な分配が可能になる。(3) 観光はバリ人によって彼ら自身の目的を促進する手段として利用されるべきだ。その経済的重要性のみならず，バリ人が中央政府からバリ人の文化的アイデンティティの十分な承認を獲得し，インドネシア国家内におけるバリ人の地位を高めるために，自分たちの島の名声を利用すべきだ（ibid.:83-84）。

バリ政府当局の目には観光は，経済発展の最も確実な資源であると同時にバリにおける外国文化の影響をひろめる最も確実な力と映った。一方において，芸術的，宗教的伝統はバリの名を世界中に有名にし，観光客を惹きつける主要なものとして提供され，バリの文化をバリ島の観光発展の最も貴重な「資源」に変えた。しかし，他方において，外国人訪問者によるバリの侵略は「文化汚染」[3] というふうに理解された。従って，「バリ文化を汚染することなく観光開発がなされるためにはどうしたらいいか」ということが文化観光に課せられた仕事となった。

「観光は文化に依存するが，文化にとって観光は脅威である」というこの問題は，1930年代から1970年代までバリの観光政策計画に責任のある当局者（オランダ植民地政府，SCETO コンサルタント，世界銀行専門家，バリ政府）が直面していた問題であった。バリ人自身の解決策は，外国の先人のそれとは異なり，観光客を海岸に囲ったままにする代わりに，彼らを歓迎することであっ

た。この選択の背後にある考えは，観光がバリ島で発展している限り，バリ人はそれを自分たちの経済発展の促進のために資本主義化する方がよいというものである。さらにバリ人は自分たちの文化の海外での評判を純粋に誇りに思っていて，観光客に自分たちの伝統を最もいい形でみせようとした。観光を通して文化はバリ島の主要な経済資源に変換され，さらにバリ文化は中央政府との交渉の論点になった（ibid.:85-86）。

文化観光はバリ人にとって文化的価値と経済的価値の交換に相当する。バリでは観光の文化的コストを最小限に抑えながら，観光の経済的利益をいかにして極大化することができるのかといった問題が，1977年と1979年の間の5回のセミナーで議論された。この一連のセミナーでは，観光開発に対してバリ文化の保持という対立的関係ではなく，両者の必要性を同時に認めていこうとするのが文化観光の立場であり，これらは両立しうると主張された。文化観光の解決の道は，文化と観光を同時に促進することにあり，そうすれば観光開発は文化の互恵的発展に帰結することが保証されるという。これは1979年，文化長官と観光長官の両者による合意文書への署名によって実効性が与えられ，「文化観光の促進と発展のための協同委員会」の創設に帰結した。この委員会の目的は，「文化の対象となるもは観光の発展のために大いに活用すること，そして観光開発の収益を文化の促進と開発のために利用すること」（ibid.）であった。

かくして，当初「文化汚染」の原因であるとして非難された観光は，今やバリの「文化の再生」の力であるという絶賛に変わった（ibid.:89）。観光客のお金がバリ人の芸術的伝統における関心を復活させ，外国人訪問客によるバリ文化への賞賛がバリ人のアイデンティティの意識を強化した。観光はバリ文化の保存と再活性化に貢献し，バリ文化をバリ人の利益と誇りの源に転換したのだった。

マスタープランでは，本来，ヌサドゥアとサヌール，クタ以外の所に大きなホテルや施設を建設することが禁じられていたが，1988年，バリ州知事は15の観光地を設け，事実上，マスタープランによって課せられていた諸制限を撤廃した。1990年にはマスタープランの見直しの同意書が作成された。

6．バリの伝統的建築様式と場所性の商品化

前述のように，バリのホテルの建築様式において，バリの伝統的建築様式や場所性というものを最初に重視したのはアメリカ人のコーク（Koke）夫妻で，クタビーチホテルであった。

建築様式におけるバリスタイルがインターナショナル様式に対して強く意識された2回目は稲垣によると戦後のマスツーリズム到来の1960年代であるという（稲垣1998）。1963年に日本の戦後賠償をもとに建設されたバリ最初の五つ星ホテル，ホテルバリビーチがインターナショナル形式の建築様式であったのに対して，同じサヌールにバリの民家に範をとったタンジュンサリが開発された。10階建てで300室のホテルバリビーチに対し，タンジュンサリは塀で囲まれたガーデンヴィラとよばれる宿泊棟で，バリの民家の雰囲気をつくり出そうと在来工法で建築された（ibid.）。

1980年代中頃になると，既に見たように，ヌサドゥアに地元の人々と接触のない閉鎖的な大型リゾートが誕生した。これらのホテルはマスツーリストを対象にしたインターナショナルな様式である。大規模化にともなって，個人客から団体までの多様な客層が混在するようになり，一定の雰囲気，一定のスタイルの維持が困難になり，サービスレベルの低下，チェーン化による場所性を無視した画一化が生じはじめた。

1980年後半以降のこうした状況を背景に，徹底した場所性とバリスタイルを追求して登場したのが，アマンダリ[(4)] である。アマンダリは，アマンリゾートが開発・運営を手がけ，1989年に開業したコテージタイプのホテルで，バリの民家をその最も洗練した形で取り入れた最初のホテルであるオベロイなどを手がけたミュラー（Muller）により設計され，地元の職人により建設された。また人類学者であったミュラー夫人のバリの集落に関する民族学的知識も活用され，地元の集落の建築を忠実に再現したといわれる（稲垣1994：234）。塀に囲まれた各ヴィラはバリの伝統的技法に忠実につくられており，かなり正確にバリの民家構造が再現された。施設内に置かれるバリヒンドゥーの神像や祠も教義に忠実に造られ，浄化の儀礼を受け，ヒンドゥー司祭によって日々護持さ

れている。建物は非常に豪華ではあるが，構造や外観，配置などは周囲の民家と変わらなく以前からそこにあった集落を思わせる造りになっている。地元の建築資材や食べ物などを調達し，地元民のもつ固有の場所において得られる知識，地元の労働力の活用等々地元文化との接触を積極的に志向したのであった(ibid.：236)。

このアマンダリにおいては建築様式におけるバリスタイルばかりでなく，従来のホテルにはみられなかった場所性というものが初めて意識され追及されたのだった。即ち，従来，多くのホテルが海辺立地なのに対して，アマンダリは，ウブドの近くの内陸の農村，クデワタンの集落のなかに立地し，まわりはアユン川の渓谷と田，民家，電柱などの集落の日常風景に囲まれている。稲垣の言葉を借りれば，アマンダリは既存のリゾートではマイナスの価値でしかなかったこれらの風景を「バリの集落が来訪者を迎える」,「集落の中に隠れる」というコンテクストにおいてプラスの価値に転換したのである（ibid.：234)。

アマンダリの場所性の創意工夫はあらゆる所に見られた。例えば，ホテルの施設はかつて棚田だった所に立地し，開発によって集落と分断されてしまったが，アマンダリは敷地内に通路を設け，棚田に地元住民が直行できるよう便宜をはかり，敷地内を歩く地元民や棚田で農作業をしている農民の姿にもクデワタンの風景の一部としの価値を見出したのだった。アユン川の渓谷に流れ落ちるエッジレスのプールもまた棚田を思わせるデザインとなっていて，泳ぐという行為以上に「視覚的に楽しむ」といった趣向になっている（ibid.)。稲垣は，アマンダリを構成するすべての表現は「場所」を商品化するために組織化されていると指摘する。しかも商品化しようとした場所は，アマンダリが立地するクデワタンという，人々の生活の核であり，帰属意識の対象であるバンジャールそのものであったというのだ（稲垣1998)。

ところで，どんな場所であろうと，バリ人はその場所に何か超自然的存在がいると信じている。人々はある場所に建物を建てるときにはそこに以前からいるその超自然的存在に対しても小さな寺院か祠を建てなければいけないと信じている。そして地域の司祭がその超自然的存在に対して，新しくそこに建てた

寺院に移り住むよう導く。そのような適切な処置をしなければそこは，その超自然的存在によっていつも邪魔されるというのだ。ホテルを建てる場合にもこのことは例外ではない。アマンダリでもそうであったように，ホテルの敷地内に小さな寺院か祠を建て日々護持することによって，開発業者はホテルやゴルフコース，レストランの建設における安全が保障されると信じている。アマンダリの施設内に置かれたバリヒンドゥーの神像や祠は単なる装飾などではないのだ。それらが教義に忠実に造られ，浄化の儀礼を受け，ヒンドゥー司祭によって日々護持されているということは，バリの「真正な文化」そのものなのだ。

バリ出身のリゾートホテルのオーナーには先のアマンダリとはまた違った独特の場所性の感覚がある。彼らが追求する場所性は，単なる風光明媚性などではなく，より宗教的性格のものである。即ちそれは，宗教的に浄化されたより神聖な所という意味での場所性であり，その大地から特別な力が感じられる場所なのだという。彼らによって選択されたこのような場所はそばに強力な寺院が立地していることが多い。即ち，その神聖さにおいて強力な寺院に挟まれた一角などは理想的な場所ということになる。そのような理想的な場所を求めて彼ら自身の目と感覚に頼って自ら方々探し回るという。彼らが目指すのは，宿泊客がそのような場所性のもつ癒しの力によって心身共にリラックスできる空間であり，建物の内装や外装に施されたバリ的意匠はそれを補完するための二次的役割を負わされているに過ぎない。即ち，彼らが観光客に商品として提供しようとするものはバリ的な安らぎと癒しを提供するホテル空間であり，あるいはトータルな意味でのバリスタイルであるといえるだろう(5)。

7．リゾートホテルと地域社会

バリ観光の最大の目玉はなんといっても祭りや芸能であるが，それらの背景となるバリ人の日常生活もまた観光の大きな誘因となっている。中村が言うように，バリにはそこに住む人々の宗教的な生活という魅力も存在し，「無数にあると言われる寺とその儀礼，寺へ供物を運んでいく女たちの行列，儀礼に賑やかさを加える伝統的音楽の演奏と舞踊，さまざまな芸能，あるいはまた，さ

ながら祭りの御輿を思わせる火葬の行列こそがバリの提供する最も重要な《風景》だったのである」(中村1994：33)。

祭礼や儀礼さらにその背景となっている宗教や日常生活というこの特殊バリ的な風景を支える重要な要素に，共同体としてのバンジャールがある。バンジャールはいわゆる集落として社会的まとまりを持った地域集団であり，全てのバリ人はバンジャールの一員として生活し，彼らにとって最も重要であると考えられる宗教儀礼を始め様々な活動に参加する。バリ人にとってバンジャールは，生活全般において彼らがゴトンロヨンと呼ぶ相互扶助や共同作業を行うところであり，バンジャールを抜きにしてバリ人としての生活は考えられない。バンジャールの一員でなければバリ人ではないとまで言われて，儀礼や祭礼も含めてバリ人の生き方そのものがバンジャールの生活に深く埋め込まれているのである。

そこで，再びバリ南部に目を転じて，ヌサドゥアやジンバランの最近の新しいタイプのリゾートホテルは地域住民との間にどのような関係を持っているのであろうか。ヌサドゥアのど真ん中の巨大リゾートホテル群は別にしても，バリゴルフ＆カントリークラブの経営するワンティランやアマングループのアマヌサ，そしてジンバランのパンシー・プリ・バリなどはそれが位置するバンジャールに帰属する。バンジャールでは毎月定例の会合があり，その時にはホテル側にも出席の要請がある。その際，ホテル側は必ず従業員の一人を会合に派遣するという。そしてバンジャールの決定事項に対してはバンジャールの住民と同じように従う。例えば，バンジャールの取り決めによる様々な相互扶助活動には，海岸や道路の清掃，寺院の祭礼の準備や祭礼への参加，寄付等々，様々あり，ホテルの従業員といえどもバンジャールの一員としてこうした活動に参加するという。

ヌサドゥアのワンティランは常にバンジャールの長と密接にコンタクトを取りあっており，もし急にもっと人手が必要となればすぐバンジャールの長に問い合わせている。また，例えばゴルフコースに水牛が迷い出てきた場合でもすぐバンジャールに連絡するだけで，あとは，バンジャールがその持ち主に連絡

して敏速に対応してくれるという。ホテル側はまた，バンジャールが寺院の管理や儀礼をしてくれるのでそのお礼として定期的に寄付をしている。

ヌサドゥアのブアル村の周辺にはとても神聖な場所がいくつかあり，二つの小島の大きな方にはプラ・ビアス・トゥゲルと呼ばれるお寺がある。そのお寺は岩の上に自然につくられた台座にすぎないものであるが，村人たちは寺の神を敬ってその岩に儀礼用のパラソルを立て，ペロン（市松模様）の布をまきつけ，その布をひんぱんに新しいものに取り替えたり，供え物を持って毎日このお寺を守ってきた。プラ・ビアス・トゥゲルの神を敬うための場所として海岸にさらに2つの寺が建っている。一つは，現在，グランド・ハイヤット・バリが建っている場所である。バンジャールの司祭が毎日必ずそこの神様に供物を捧げているが，ホテル側も非常に協力的であるという。もう一つの大事なお寺は地中海クラブがあるビーチの先端にあり，この寺も村人とホテル側の協力によって守られているという。

バンジャールは，村として何か必要なものが出てくると，その都度ホテル側に相談を持ちかけ，交渉する。また，バンジャールからの求職願いに対しては，ホテルに職の空きがあれば即座に採用されることが多い。ワンティランの経営母体であるヌサドゥアのバリゴルフ＆カントリークラブ観光会社の従業員の60％は近くのバンジャール出身者であった。さらにまた，ホテル従業員の職業訓練はホテルの経費で行うことになっている。これはＢＴＤＣが住民から土地を買い上げる際に，地域住民との間にかわした合意事項に基づく。一般にバリの他の観光関連産業も地域のバンジャールとこのような緊密な協力関係にあるという。

観光資源として極めて重要なバリの文化は，かくしてバンジャールシステムによって維持されている。バンジャールは今日でも人々の日常生活に大変強い影響力を持っているのだ。どの子供も学校からではなくバンジャールから供物の作り方や捧げ方，ダンスその他多くのことを習うことが多い。各バンジャールには集会場のような大きな建物や寺院があり，人々は特定の日に一緒に集まり，バンジャールの長の話に耳を傾け，何か問題があればそこで議論し，ある

いは宗教的儀礼を行ったりする。子供たちも何日かおきにバンジャールの集会場あるいは寺院においてダンスや供物の作り方，捧げ方，楽器演奏の仕方など非常に多くのことを習い訓練される。

バリでは毎日島内のどこかの村でオダラン（寺の祭礼）が行われている。オダランではかならず神を慰めるための舞踊や仮面劇が奉納される。オダランの最初の夜には神を寺に迎え入れる儀式が行われる。オダラン2日目以降は，神に奉納するためだけでなく村人の楽しみのために，村ごとに様々な芸能が演じられる。宗教と日常生活が一体となっているバリでは，儀礼もまた日常の一部としてとらえられ，自然に行われている。バリの宗教，あるいはバリ人の生活そのものが，あたかも儀礼を行うためにあるかの様な印象を人々に与える。

バリ人にとって宗教的生活は至極当然の暮らしなのであり，バンジャールの人々の精神的支柱として最も重要なものがバリヒンドゥーである。バリ人のヒンドゥー教の信仰は生活から離れて独立して人々の心の中にあるのではなく，日々の祈りと供え物を神々にを捧げることそれ自体が彼らの毎日の生活の一部を構成している。したがって，彼らの祈りは即生活であり，生活即宗教である。ヒンドゥー教の教義を事あらためて習うというのでもなく，バリの人々はそういった日々の生活を通して自然にヒンドゥー教の教えを体得していくのだ(スティア 1994)。

バリは観光化すればするほど，ますますバリヒンドゥーとそれに伴う儀礼や芸能が活発になり豊かになっていくということは当のバリ人の口からも何度も耳にした[6]。バリヒンドゥーが観光客を引き付け，観光客が金を落として，その金がさらにバリ人の宗教活動を促進する。現在のバリは宗教や芸能に限らず建築様式その他トータルな意味でのバリスタイルと観光化という大きなサイクルの中に存在し，まさに「バリ化」は観光の中で進みつつあるといえる。

むすび

本稿では，リゾートホテルの発展という視点からバリ島の文化観光の歴史の簡単なスケッチを試み，特に戦後のバリ州政府の観光政策について，南部のヌ

サドゥアの巨大リゾートホテル群の誕生の経緯やその後の展開について紹介した。また，南部ヌサドゥアやジンバラン地区，そして中部のウブドを例に，バリの文化に忠実であろうと試みるいくつかのリゾートホテルの事例を紹介し，リゾートホテルにとってのバリ文化とは何か，そしてさらにリゾートホテルと地域社会の関係について若干の考察を試みた。

即ち，バリのリゾートホテルにとってのバリの文化とは，商品化できる意匠やスタイルあるいは様式であるといえる(7)。バリではホテル，レストラン，観光施設などはほとんどといってよいほど「バリらしさ」を散りばめ見事な演出を凝らしている。「バリらしさ」を商品に組み込むことにより，バリ文化に触れたという錯覚をツーリストに起こさせる。ヌサドゥアの巨大リゾート地のホテル群にみられるのは様々にバリの意匠を凝らした装飾であり，それによって生の伝統文化から隔離されたビーチエンクレーブにバリ的な疑似空間を演出してそれを売り物にしているのである。

ヌサドゥアやウブドに最近建てられた新しいビラタイプの高級リゾートホテルもまたその売り物はバリ文化であった。ただし，これらの新しいタイプのホテルがヌサドゥアのメガリゾートと異なるのは，バリスタイルや場所性に対する徹底したこだわりであり，そこにあらたな差異を追求し，商品化しようとしていることである。特に，バリ出身のリゾートホテルのオーナーには宗教生活に根ざした独特の場所性の感覚があり，ホテルの立地場所には特に細心の注意を払う。彼らが求めたホテルの立地条件は，宗教的な神聖さであった。彼らが目指すのは，そのような場所性のもつ癒しの力をホテル空間として商品化することであった。バリスタイルの民家をイメージし，場所性にこだわったこのビラタイプの小規模高級リゾートホテルはバリのリゾート観光の新しいホテルの方向性となりつつある。こうしたホテルの文化表象の推移を跡づけることによって我々は逆にバリの人々が何を自分たちの文化様式であると考えているのかを知ることが出来る。バリのリゾートホテルの建築様式の変遷に注目する意味もそこにあるといえる。

リゾートホテルと地域社会との関係もまた極めて密接なものであった。リゾー

トホテルはバンジャールとの間に相互扶助関係を維持し，寺院の祭儀にも積極的に参加している。バリ人は，バリの文化観光におけるバンジャールとさらにそのバンジャールの精神的基盤であるバリヒンドゥーの重要性を何度も強調した。観光化によってバリの人の手に落ちるお金の一部は彼らが属するバンジャールのヒンドゥー寺院の供物や祭りの出費という形で聖と俗の間を相互に支え合う形で循環している。

観光は近年，異文化接触，文化交流の一形態としての役割を強めている。バリは多くの地域で失敗した経済的な成功と伝統的文化へのアイデンティティ強化を両立させたことでまれな成功例とみなされている。

註

(1) 本稿は平成9-11年度の文部省国際学術研究「東南アジアの「伝統」の変容と創世」（代表者・黒田 景子）に基づく研究成果の一部である。バリでの調査の過程で，村田裕子氏と鵜川大介氏には現地でのコーディネーターとして大変お世話になった。また，ホテル・パンシー・プリ・バリのセールスマネージャーのタン氏，ＧＭのモラール氏，ヌサドゥアのワンティランのグスリ氏，さらにワカグループのクトゥ・シアンダナ氏，ウブドのアナック・アグン・ラーマ氏，イバ・ホテルのGMのチョック・ラカ氏にはこころよくインタビューに応じていただいた。上記のすべての方々のご協力に，記して心より感謝する次第である。

(2) それ以前は西ジャワに1960年に開校した１校しかなかった。1980年に３つ目の専門学校が西スマトラに，そして1983に４つ目がをスラウェシのメナドに開設された。これらはすべて政府が経営する学校で，安い費用で高度な専門教育を受けられた。

(3)「バリの文化汚染」源として観光が非難されたとき問題となったのは，寺院と宗教の冒涜であり，社会関係の打算化（金銭化），社会的連帯感の弱体化，商業主義の浸透に帰因する道徳的規範の弛緩であった。

(4) アマンリゾートについては日本の雑誌の特集号（Figaro japon 1994年11月号，1997. 10月号）やバリ在住の写真家による写真集（Helmi, Rio & Walker, Barbara 1995）でも取り上げられて注目されてきた。アマンリゾートは香港に本社を置く高級リゾート開発・運営企業で，現在バリにおいて，アマンダリ（クデワタン・ウブド，1989開業，30室），アマンキラ（マンギス，1992開業，33室），アマヌサ（ヌサドゥア，1992開業，35室）の３施設を運営している。アマンリゾートが目指すのは，高度なサービスや確立された雰囲気，スタイルであるといわれ，施設を小規模化し，投資，運営を効率化し，１室あたり平均従業員数が4.4人という高度なサービスを実現することで大規模施設との差別化を図ろうという方向性である。アマン

リゾートの展開についての詳細は稲垣（1994,1998）を参照。

(5) 例えば，ウブドのイバ・ホテルや，同じウブドのワカデウマ・ホテルなどを経営するワカグループがこうした方向性を強く打ち出している。

(6) ウブドのマンダラ舞踊団の創設者の孫に当たるアナック・アグン・グデ・ラーマ氏もインタビューの中で特にこの点を力説していた。また，ワンティランのグスリ氏の話によると，昨年，バリのヒンドゥー教徒コミュニティは新しい政策を発表したという。それは外国人がバリスタイルで結婚式を行うことを禁じるもので，結婚衣装の使用は許可されるが，バリ人と同じヒンドゥー教方式の式のやり方での結婚の儀式は禁じられた。こういったこともバリ人の間でヒンドゥー教が年々強くなっていると言われる一端を示しているように思われる。

(7) ある雑誌が広告に，供物を捧げる器として使われるココナッツの葉っぱを使ったために，バリ人が怒って裁判所に雑誌社を訴えた結果，廃版に追い込まれたという。バリ人によればこの雑誌社はバリ人の宗教を冒涜したというのだ。供物を捧げる時には必ずココナッツの葉っぱによって作られた器が使われる。ところが，雑誌社は，その供物用のココナッツの葉の器にあろうことか，ゴルフボールを入れて写真を撮り勝手に広告に使ったというのだ。このようなエピソードはバリ人にとってヒンドゥー教の重要性を示すばかりでなく，バリスタイルへの強いこだわりという側面もみてとれる。

参考文献

Bhanu, Shamira (ed.) 1995 *Nusa Dua*: Reflection of Bali, Shingapore: Editions Didier Milllet.

Helmi, Rio and Walker, Barbara 1995 Bali Style, Singapore: Times Editions.

『FIGARO japon』TBS ブリタニカ 1994年11月号，1997年10月 5 日号.

稲垣勉 1994『ホテル産業のリエンジニアリング戦略』第一書林

稲垣勤 1998『バリにおける観光表象の変遷』立教大学社会学部稲垣研究室

永渕康之 1998『バリ島』，講談社現代新書

中村潔 1994「バリの儀礼と共同体」，河野亮仙・中村潔編『神々の島バリ』春秋社，pp. 33-58.

Picard, Michel 1993 Cultural Tourism in Bali: national integration and regional differentiation, in M.Hitchcock, V.King and M.Parnwell(eds.) *Tourism in South-East Asia,* New York: Routledge, pp.71-98.

Picard, Michel 1996 *Bali: Cultural Tourism and Touristic Culture,* Singapore: Archipelago Press.

スティア，プトゥ 1994，『のバリ案内』（鏡味治也，中村潔訳）木犀社

山下晋司 1992「『劇場国家』から『観光者の楽園へ』－二〇世紀バリにおける『芸術・文化システム』としての観光」，『国立民族博物館研究報告』(17)1，pp.1-33.

山下晋司 1993「楽園バリの演出」(清水昭俊，吉岡政徳編『オセアニア③近代に生きる』東京大学出版会，pp.139-152.

山下晋司 1996a「《南》へ－バリ観光のなかの日本人－」，山下晋司編『移動の民族誌』岩波書店，pp.31-59.

山下晋司 1996b「「楽園」の創造」，山下晋司編『観光人類学』新曜社，pp.104-112.

吉田竹也 1997「バリ島の伝統・観光・バリ研究」，森部一・水谷俊夫・大岩碩編著『変貌する社会』ミネルヴァ書房，pp.102-122.

吉田禎吾編 1992 『バリ島民　祭りと花のコスモロジー』，弘文堂

吉田禎吾 1994「バリ文化の深層へ」，河野亮仙・中村潔編『神々の島バリ』春秋社，pp.1-12.

吉田禎吾 1996「インドネシア国家におけるバリ」,綾部恒雄編『国家の中の民族－東南アジアのエスニシティ』明石書店，pp.253-285.